

国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成11年度国立国語研究所公開研究発表会報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2052

平成11年度国立国語研究所公開研究発表会報告

1. 研究課題「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」中間報告会分科会（非公開）
平成11年12月20日（月） 国立国語研究所内
参加者：研究課題関係者・所内関係者40名
2. 公開研究発表会「日本語学習のひろがりー日本語総合シラバスの構築に向けてー」
（研究課題「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」中間報告会）
平成11年12月21日（火） 国立国語研究所講堂ほか 参加者：140名
3. 「視聴覚教材フォーラム5」公開発表会
平成11年12月22日（水） 国立国語研究所講堂ほか 参加者：80名

国立国語研究所は毎年「公開研究発表会」を開催している。平成11年度は、上記のタイトルの下に、平成8年度～12年度の5年計画で進行中の研究課題「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」（以下「本課題」）の研究経過を紹介する中間報告会として行った。本稿では、公開研究発表会、それに先立って行った研究課題関係者による分科会、および、引き続き行った「視聴覚教材フォーラム5」公開発表会について、あわせて報告する。

0. 研究課題「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」について

0.1. 課題の趣旨

本課題は、多様化する日本語学習者一人ひとりに対して最適な学習内容と学習プログラムを提案するための理論的基盤を作ることを目的とする。

近年、日本語学習者の学習目的・背景・学習機会が急速に多様化しており、教育機関等において対応が模索されているが、時間的余裕や利用しうるリソースの制約等から臨時的な方策になりやすく、広く利用しうる成果となりにくい。また、就労者、日本人と結婚して来日・定住する人々、一時滞在者の同伴家族など、専門的に対応する教育機関が用意されていない人々については体系的な対応がなされにくい。こうした状況に対処するため、各現場における個別の努力と並んで、問題をより広い視野から把握し、一般に適用できる解決方策を提案することが必要である。

特に、それぞれの学習者が何を優先的に学習すべきであるかを見定めることの必要性が高い。本課題では、言語項目、コミュニケーション能力、文化的事項にわたって、学習の対象となりうるあらゆる項目が列挙され、個々の学習者が学習する項目をそこから選択できる母集団資料として「日本語総合シラバス」を作成すること、さらに、そこから一人ひとりの学習者の個人シラバスを抽出するための基準を提供することを目的とする。

0.2. 多次元シラバスとしての日本語総合シラバス

日本語教育の場において学習されるべき内容が日本語体系の知識にとどまらないこと、また、学習すべき内容は「文法規則」「場面種別」といった単一の分類原理では網羅しにくいことは広く認識されている。本課題では、さまざまな学習項目を網羅するためには、複数の次元にわたる「多

次元シラバス」を構築することが必要であると考え。すなわち、日本社会における人々の行動を理解し自らも適切な行動をとる「社会文化能力」、日本人との間で適切なコミュニケーションを行う「言語運用能力」、そのために日本語の体系に基づいて適切な文を生成する「言語体系操作能力」の少なくとも三つの次元にわたって学習項目を列挙することが必要であると考え、それぞれの項目一覧表作成を進めている。

1. 分科会 12月20日（月）午後

分科会では、本課題関係者の間で、研究の進行状況を確認し、今後の進め方と取りまとめの方向を話し合った。ここでは、本課題の研究組織の構成に沿って四つの分科会を設け、個々の研究グループからの担当領域に関する報告を受けて討議を行った。なお、各第2分科会・第3分科会に、所内研究者の参加があった。

第1分科会「学習内容」 コーディネータ：中道真木男〔国立国語研究所日本語教育教材開発室〕

第1分科会では、本課題着想の背景となった日本語学習者の多様化を初めとする社会状況、本課題が提供する「日本語総合シラバス」と「教材開発指針」の有用性やあるべき内容についての認識を確認した。また、言語体系操作能力に関する学習項目一覧表の作成状況を報告した。

報告①「日本語問題の広がり」（中道真木男）本課題の目的、および、日本語教育研究の目標は、学習者の多様化を日本語問題の多様化としてとらえなおし、それに対処する教育の内容とシステムのあり方を追究することであるとの認識を確認した。

報告②「学習内容の広がり」（二通信子〔北海学園大学助教授〕）日本語教育の内容の多様化・広範囲化の背景に、言語体系から言語運用へといった言語能力観の変化と並んで、学習目的の多様化、学習環境や利用しうる人的リソースの多様化、学習者特性に応じた学習方法の個別化、さらには、日本人自身のコミュニケーション能力への関心などの要因があるとの認識を確認した。

報告③「基本語用例データベースの記述方式」（有賀千佳子〔国立国語研究所客員研究員〕）

総合シラバスの基礎資料として作成中の「基本語用例データベース」について、その内容と記述方式を紹介した。なお、「単位方略」については、国立国語研究所（1993）『日本語教育映像教材中級編関連教材「伝えあうことば」4 機能一覧表』（インターコミュニケーション刊）第2部「談話型一覧表」を参照のこと。

報告④「談話種別分類の課題」（石田恵里子〔国立国語研究所客員研究員〕）場面とそこで実現される言語作品である談話とを関連づけるカテゴリーとして「談話種別（ジャンル）」を分類・列挙することの重要性を指摘し、談話の用途ないしそこで遂行されるタスクの種別を優先的な分類理念とする分類作業の進行状況を報告した。

第2分科会「言語運用」 コーディネータ：杉戸清樹〔国立国語研究所言語行動研究部〕

言語運用能力に関わる学習項目一覧表の作成と、それに関連する研究の進行状況を確認した。

報告①「言語運用能力の内容」(杉戸清樹)本課題では、言語運用能力を単位方略の配列と実現の能力と考えているが、その枠組みに関する問題点、特に、単位方略の実現形態と場面条件との関係を記述するむずかしさ等を指摘した。また、作成される言語運用能力シラバスを教育に利用する上での問題点を指摘した。

報告②「談話構造の分析」(土井真美 [群馬大学助教授]) 単位方略の概念によって談話構造を記述する方式の妥当性と問題点に関するこれまでの議論の内容と、単位方略種別を補充し必要な組み替えを行う作業の進行状況とを報告した。

報告③「人物認識」(山崎恵 [姫路獨協大学助教授]) 発話のあり方を規定する場面構成要因を、話し手の対人認識、すなわち、話し手自身、聞き手、話し手・聞き手間の関係の3点に関する認識に集約してとらえる考え方を説明し、その限界を検討した。

第3分科会「社会文化能力」コーディネータ：佐々木倫子 [国立国語研究所日本語教育指導普及部]

社会文化能力に関わる学習項目一覧表の作成と、それに関連する研究の進行状況を確認した。

報告①「社会文化知識のとらえ方」(佐々木倫子) 言語運用の背景として必要な社会文化能力の内容、その教育として行われている日本事情教育の内容、地域在住外国人の経験事例等に見られる異文化接触場面で問題になる社会文化知識の内容などについて、これまでにとらえられたことがらを報告した。

報告②「文化知識の構造」(小川早百合 [聖心女子大学助教授]) 日本人の社会文化意識の一端をとらえるために計画した、提示された語からの自由連想によって思い当たる語を記述させる「語連想テスト」の概要と予備調査結果を報告した。

報告③「社会文化能力の獲得」(村岡英裕 [千葉大学助教授]) 学習者が日本の社会文化知識を習得する過程を、言語能力における中間言語の仮説を参考に調査する計画の概要と進行状況を報告した。

第4分科会「学習設計」コーディネータ：能波由佳 [国立国語研究所日本語教育教材開発室]

「総合シラバス」を個々の学習者の個人シラバス作成に利用する際に必要な事項に関する研究の進行状況を確認した。

報告①「学習ニーズの把握」(文野峯子 [岡崎学園国際短期大学教授]) 学習者のニーズを到達目標としての能力として見るだけでなく、学習過程の各時点において多面的にとらえるべきであるとの認識を確認した。

報告②「学習者条件の記述」(林さと子 [津田塾大学助教授]) 学習の内容と方法を規定する学習者条件を構成する要因とそれらをとらえる方法に関する議論の内容を報告した。

報告③「学習手段の概念」(能波由佳) 教授者は、学習設計において、学習者に最適な学習手段の選択を意識すべきことを提唱する研究の経過を説明した。

報告④「学習者と支援者」(足立祐子 [新潟大学助教授]) 地域の日本語教室を例として、学習支援者としての教授者の役割を考えてきた一連の論議の内容を報告した。

2. 公開研究発表会「日本語学習のひろがりー日本語総合シラバスの構築に向けてー」

公開研究発表会では、ポスター発表と全体会における口頭発表とを行った。

2.1. ポスター発表 12月21日（火）午前

本課題の進行過程で取り上げられた個々のテーマを紹介するポスターディスカッションを行った。所内研究者の研究4件についても同様に紹介した。また、後述の「視聴覚教材フォーラム5」について、ポスター3件を展示した。

①「視聴覚教材フォーラム5」ワークショップ報告（3件）【内容は次項3を参照】

②本課題各部会・ワーキンググループ等における検討課題の紹介

（※発表者のうち《 》は、ポスター準備のみ担当）

「ジャンル（談話種別）の分類課題」石田恵里子〔国立国語研究所客員研究員〕

「基本語用例データベースの構想」有賀千佳子〔国立国語研究所客員研究員〕

・《桜木紀子〔国立国語研究所客員研究員〕》

「日本語ボランティアの問題」二通信子〔北海学園大学助教授〕

【以上、上記第1分科会における報告に基づく発表】

「対人認識から捉えた参加者記述」山崎恵〔姫路獨協大学助教授〕

「タクティクスによる談話行動の記述」黒野敦子〔日本国際協力センター〕

・《金秀英〔東京外国語大学研究生〕》

【以上、上記第2分科会における報告に基づく発表】

「日本人の社会文化知識の調査ー日本人の連想を記述する辞書のための語連想調査ー」

小川早百合〔聖心女子大学助教授〕・備前徹〔専修大学助教授〕

【上記第3分科会における報告に基づく発表】

「学習者条件の記述」浜田麻里〔大阪大学助教授〕・文野峯子〔岡崎学園国際短期大学教授〕

「学習手段データベース作成の試みー教師のための授業設計支援システムの開発ー」

加藤由香里〔国際基督教大学助手〕・能波由佳

・八田直美〔国際交流基金専任講師〕・藤長かおる〔国際交流基金専任講師〕

「支援者（教授者）の役割」足立祐子〔新潟大学助教授〕

【以上、上記第4分科会における報告に基づく発表】

「接触場面の言語行動ー「確認」の記述と分析ー」

武田誠〔東京外国語大学大学院〕・土井真美〔群馬大学助教授〕

・永山友子〔筑波大学大学院〕・能波由佳

学習者と日本人との共同作業の場面における伝達行動を分析する。

「書きことば」と「話しことば」加納千恵子〔筑波大学助教授〕

・《田中真理〔電気通信大学助教授〕》

言語体系として、また、学習対象としての書きことばと話しことばを対比する。

③国立国語研究所内研究者の研究紹介【内容省略】

「現代語の複合辞の意味・用法」山崎誠〔言語体系研究部第1研究室〕

「国立国語研究所の電子化語彙資料」 柏野和佳子 [言語体系研究部第2研究室]

「対訳コーパスによるモダリティ表現の対照研究—「だろう」と「ba」をめぐる—」

曹大峰 [国立国語研究所招聘外国人研究員]

「在日留学生の日本語学習動機と日本語習得」

杉本明子 [日本語教育研修室]・黒沢学 [東京大学大学院]・文野峯子

・大島陽子 [お茶の水女子大学大学院]

2.2. 全体会 12月21日（火）午後

発題①「総合シラバスの構想と研究経過」 中道真木男 [国立国語研究所日本語教育教材開発室]

本課題の趣旨を説明し、その中核をなす「日本語総合シラバス」を言語体系操作能力・言語運用能力・社会文化能力からなる「多次元シラバス」として考える構想を紹介した。

発題②「学習者と学習機会」 春原憲一郎 [海外技術者研修協会] 教養主義・行動能力主義に基づく

学習・教育をこえた接触・交流としての学習のあり方を提唱し、活動例を提示した。

発題③「教育システムと学習者」 足立祐子 [新潟大学助教授] 地域の日本語教室を例として、学習

者にとっての学習の意味づけと、そこに関わるさまざまな支援者の役割とを再検討することの必要性を指摘した。

討議 指定討論者：J. V. ネウストプニー [桜美林大学教授]・林さと子 [津田塾大学助教授]

・佐々木倫子 [国立国語研究所日本語教育指導普及部] 司会：中道真木男

討議においては、まず3名の指定討論者に発言を求め、その後、フロアとの意見交換を行った。

3. 「視聴覚教材フォーラム5」 公開発表会 平成11年12月22日（水）

「視聴覚教材フォーラム5」は、外国人に対する日本語教育において映像教材を有効に利用する方法を開発し普及するための活動の一環として、平成11年度に開催した。

日本語教育に映像教材を利用することによって、学習をより活性化し多様な学習内容を教室で扱うことができるようになることは、早くから期待されている。国立国語研究所は、これまでに3種の映像教材を作成・公表し、さらに、それらを活用する方法を開発・普及するために種々の活動を行ってきた。そのうち、「視聴覚教材フォーラム」は、教授者がグループ活動によって映像を用いた授業計画を作成する「ワークショップ」と、そこでの討議経過や作成教案を発表する「公開発表会」とからなる。

「視聴覚教材フォーラム5」ワークショップは、名古屋大学国際言語文化研究科と国立国語研究所との共催により、平成11年10月に名古屋大学で開催した。参加者は一般に募集し、28名の参加を得た。また、大曾美恵子氏（名古屋大学教授）、土井真美氏（群馬大学助教授）、および、西口光一氏（大阪大学教授；公開発表会関連発表発表者）が傍聴して助言をくださった。ワークショップでは、国立国語研究所が平成9年までに作成した映像教材『日本語教育映像教材初級編「日本語でだいじょうぶ」』を共通の素材として、下記のように、グループごとに異なる3種の学習者に対する教授計画の案を作成した。

「視聴覚教材フォーラム5」公開発表会は、平成11年12月22日に国立国語研究所で開催し、ワー

ワークショップにおける各グループの検討経過と作成教案を、口頭発表とポスターディスカッションの二つの形で発表した。あわせて、基調講演と関連発表を行い、参加者との意見交換を行った。

趣旨説明 能波由佳 [国立国語研究所日本語教育教材開発室]

基調講演 「学習内容の立体化と映像」 中道真木男 [国立国語研究所日本語教育教材開発室]

「総合シラバス」の考え方を適用し、学習内容を言語体系・言語伝達・社会文化に関する知識および能力に分けて意識し、その学習に映像を利用する方法について論じた。

ワークショップ報告 グループ① 「地域の日本語教室で映像教材を利用する」

コーディネータ：足立祐子 [新潟大学助教授]

地域に在住する外国人を対象とする「地域の日本語教室」において、多様な背景や学習目的を持つ種々の学習者が、それぞれの日本語力に合った学習内容を発見して自分なりの学習を行い、日本人支援者もさまざまな形で関わりながら、一つの学習の場を作り出すために、共通素材として映像教材を用いる学習計画案を作成した。

ワークショップ報告 グループ② 「就学生の『理解語彙』を『使用語彙』へと高める方法を考える」

コーディネータ：黒崎亜美 [ラボ日本語教育研修所講師]

就学生である学習者は、まず、日本語能力試験1級合格を目標に学習するため、「つめこみ」的に学習した語彙は、会話や文章で実際に用いられることが少なく、進学後の日本語力につながりにくい。視聴覚教材を利用することによって、導入・定着をこえて応用のための語彙指導を行い、試験のために学習した語彙を「理解語彙」から「使用語彙」へと高める教授計画案を作成した。

ワークショップ報告 グループ③ 「仕事の場で人間関係をうまく保つ方法を視聴覚教材に学ぶ」

コーディネータ：桜木紀子 [早稲田大学非常勤講師]

仕事の場で日本語を用いようとする学習者にとっては、話し手がメッセージに込める評価や感情を正確に受信し表現することが最も重要であると考え、発話に含まれるそうした情報に注意を払い、理解するための授業案を作成した。

ポスター発表 (上記グループ①～③が作成した教案の詳細をポスターで紹介した)

関連発表 「非直線的アプローチによる基礎段階後期の教育と『日本語でだいじょうぶ』」

西口光一 [大阪大学教授]

大阪大学留学生センターで実際に行われている「日本語教育映像教材初級編」を主教材とするコースを紹介し、学習者の自律性を活用する学習設計の考え方を主張した。

討議

中道 真木男 (日本語教育教材開発室)